カレッジ通信

編集・発行
東京建築カレッジ

授業見学
大歓迎！
TEL 03
(5950)
1771

2年間の学びからはじまる。「建物の呼吸を感じ取る力」
まだ間に合う！東京建築カレッジ4月入学

「後継者に基礎を身に付けてもらう」「他業界からの転職者に学びの機会を与えたい」相談が相次いでいます。今年4月入学の相談を歓迎します。
☞電話03-5950-1771 東京土建技術研修センター内 建築カレッジ係

東京建築カレッジ２０２２年４月入学生募集は、入学選考会があと２回となりました（左囲み参照）。本校での２年間の研修生生活は一人ひとりの人生にとってかけがえのないものになります。迷っている皆さん、ぜひ、授業・学校見学（毎週金・土曜）にお越しください。本校は「建物の呼吸を感じ取る力」（橋本英夫教務運営委員）を身に付けた建築のプロフェッショナルを育てる学校です。

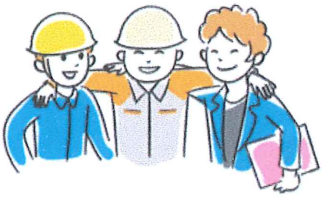
授業・学校見学の内容
・その日の授業見学
・学校の性格、運営母体、学費について
・教育理念と学習目標
・カリキュラムの特徴
・授業の流れ（学校紹介動画で紹介）
・本校と提携する就職先の紹介
・研修生派遣事業主のための国の助成金

新入社員、お子さん・お孫さんに、建築の仕事の魅力、やりがいをカレッジで学んでもらいましょう

事業主向けに国の助成金の説明も

東京建築カレッジ
第27期生募集
2022年4月入学生

第5回入学選考会は
1月26日（水）
応募締め切り1月21日（金）



第6回入学選考会は
2月22日（火）
応募締め切り 2月18日（金）

入学願書など応募書類の取り寄せはお早めに！本校の就職支援は応募後に始まります。本校入学を保障する就職あっせんをご希望の方は早期に応募をお願いします。

意欲あふれる新人を採用・育成したい中小事業主の皆様もお気軽にご連絡ください。

東京建築カレッジ
学校紹介はこちら ↑

お問い合わせ・入学相談は
☎03-5950-1771
東京土建技術研修センター内、
東京建築カレッジ

技能五輪全国大会（建築大工）本校初のグランプリ（最高位）金賞
第23期生 関根 祥智（よしのり）さん 「匠・林工務店」 足立区

12月17日～20日、東京ビッグサイトをメイン会場に開催された「第59回技能五輪全国大会」の建築大工職種で、東京建築カレッジ 第23期生 関根 祥智さん（足立区「匠・林工務店」所属の建築大工）が技能五輪全国大会のグランプリ（最高位）金賞を受賞しました。本校の卒業生、在校生が技能五輪全国大会で金賞を受賞するのは初めて。カレッジに入れば関根さんのような高い気概を持った仲間ができます。

東京建築カレッジ　第22期生の玉江マリ子さんの歩みと実践が新聞で紹介されました。
ご紹介します。　（「しんぶん赤旗」2022年1月11日付）

共に生きる

知子 画

題字は金澤翔子さん

消費者と職人の潤滑油

自然を生かし古民家改築　玉江マリ子さん(39)

「消費者が求める家を造りたい」と語る玉江マリ子さん

風情を感じる回り廊下、木製建具の窓、立派な柱、茨城県土浦市にある築130年以上の木造住宅。玉江マリ子さん（39）＝千葉県市川市＝は仲間の力を借りながら、自分たちの手で改築しようと挑んでいます。「床下はコンクリートを流したくない」「この壁は漆喰（しっくい）にする」と天然素材にこだわります。

「夫と探し回ってやっと見つけた家。自然に優しく、人が人間として本当に求める家をいつか造れるようになりたいから、実験も兼ねて」とにっこり。

昨年12月、念願の木造建築士と2級建築士の資格を取得したばかり。2人目の子どもの出産とコロナ禍の育児に追われながらの3回目の挑戦でした。「普通なら1年で取れるかもしれないが、『家族みんなで取った』という感じでうれしい」とキラキラした表情で語ります。

現場へ行けば ほとんど男性

専門は美術（特殊）塗装。「子どもの頃から絵が好きで、自分を生かせる仕事をしたかった」。フリーランスでテーマパークや映画のセットなどを手がけてきました。

「同業には女性も多く尊敬できる職人ばかりだが、ひとたび現場へ行けば、さまざまな職種の職人がいて、ほとんどは男性。いるだけで『なぜ女性が？』とさげすまれることもあった」。それが嫌で1級建築塗装技能士の資格を取得。「見られる目が変わった。それもおかしな話だけど」とつぶやきます。

現場が好きで夢中で働き、国内外で出張も経験。中国・上海の大きな仕事の前に妊娠がわかり、あきらめることに。「キャリアアップの機会だった。現場への喪失感と、母になる心身の準備、両方向き合い受け入れる作業は大変だったが、大事な作業だった」と玉江さん。「現場に行きたくて、大きいおなかを隠して現場に来ていた先輩の気持ちが初めてわかった」

出産してからは心境の変化が。利益優先で使い捨てが多い今の時代に疑問がわき、原料や環境について考えるように。「今までプラスチックを塗装で木に似せたりしてきた。でもやっぱり本物がいいなって」。建築に興味を持つようになるのは自然な流れでした。

そんな中、腫瘍が見つかり、つらい術後生活を送ります。「元気になったらやってみたいことはやろう」という思いが燃え上がりました。

東京建築カレッジに入学。同級生は高卒の男子が多く「年齢差と性別の違いを感じるほど、ついていくのが大変だった。家事育児との両立は毎日が命がけだった」と語ります。

職人を助ける 仕事してくれ

木を生かし、建築を知る大工への強い憧れを持ちますが、その道は険しく進路に迷いも。そんな時、恩師が「大工にならなくてもいい。俺たち大工は自分が一番と思ってやってきた。それが（消費者との壁をつくり）いけなかった。そんな職人を助ける仕事をしてくれ」と。

その言葉の意味は今回の古民家の購入で自身が消費者になり、初めて知ります。「当初は地元の大工さんに改修をお願いしたが、最終的に決裂した」と玉江さん。相手の「コミュニケーション能力の不足」や、「消費者に寄り添う姿勢が足りなかった」ことを理由にあげます。

「恩師の言った仕事。それは、消費者と職人の潤滑油のような仕事ではないだろうか」―。今まで始めたらとことん追求してきた玉江さん。いい仲間にも出会い、今では少し肩の力を抜き自分の道を歩みます。

「何かを犠牲にするのではなく、大切にしたいことと、やりたいことをバランスよくやろう。それがつながって、みんながそうであったらいいな」

（新井水和）

東京建築カレッジ　母体は東京土建一般労働組合。職業能力開発促進法に基づく厚生労働省所管の短期大学校。1996年、同労組が技術技能の継承と後継者の育成のために開校しました。